

2013年度すぎなみ大人塾 後期

第5回 講座タイトル「ツナガルシクミ」をじっくり考える

平成25年12月21日(土) 10:00~12:00

会場：セッション杉並 於

学習支援者：日沼禎子(女子美術大学芸術学部准教授)

坂田太郎(アサヒ・アートスクエア ディレクター)

ゲスト 小山田徹(美術家・京都市立芸術大学准教授)

学習支援者：坂田

みなさんおはようございます。前回の一言感想に「捨てるものから新しい形ができ、生き返る体験ができる」と書いていただいた方がいました。前回、みなさんは、持ってきた捨てる予定のモノをみて、そこから本を作ることになりましたね。まず、日沼さんから作業手順の説明がありましたが、最初にモノがどこから来て、どこへ行くのか想像してもらいました。あの眺め直すような行程があるパターンと、なしのパターンで、出来上がりがどう違ってくるのでしょうか。あの考える時間、モノをちょっと引いたところから見る、映画のズームバックみたいでしたよね。このズームバックには、どんな機能があったのでしょうかね。

参加者 A

本を作る前に、素材を考えることは日常ではやったことがありません。だから、新鮮な考えが浮かんできました。

参加者 B

捨てるモノで何をするんだろうと考えました。すぐ作ると予想していましたが、眺めてから本を作ると説明されました。自分の想像とは違うという過程。始めから本を作るわけではなかった突発的、予想外のところが面白かったです。はっきりした効果はわかりません。日常では目的ありきで行動することが多いが、模索していくのが楽しかったです。

参加者 C

モノに対する慈しみが増えました。モノが自分の手に届いたことが奇跡と思えます。封筒をもってましたが、最初は木ですよ。それが紙になり封筒になり、

自分に届いたのは本当に奇跡です。それを使って作品を作るのは喜びでした。

参加者 D

関連した話を思い出しました。学生の奨学金集めの活動をしている団体で、奨学金を貰って良かった生徒の話を聞くと、集まったお金の額が違ったそうです。関連づけて考えたり、ストーリーを聞くと、ゴミも生き返らせようという気持ちも生まれるのではないのでしょうか。

学習支援者：坂田

みなさん、ご感想ありがとうございます。今日は前半を小山田徹さんにお話をさせていただきます。後半は 5-6 名でグループになり、話し合ってみたくと思います。最後にグループで話したことを報告させていただきます。小山田さんは、日沼さんが企画された展覧会『ツナガルシクミ』の参加アーティストの一人でいらっしゃいます。美術家としての活動とともに、現在は京都市立芸術大学の先生もされています。今から 10 年程前、京都で小山田さんたちがオープンされたバザールカフェという、コミュニティカフェに興味をもち、私がお話を聞きに京都に行きました。そこで小山田さんに初めてお会いしました。今日は共有空間をキーワードに様々な場をつくられてきた小山田さんにじっくりとこれまでの活動をお話しいただきます。

ゲスト 小山田

みなさん、おはようございます。鹿児島出身で、京都に住んでおります。大学以来の拠点です。家族は奥さんと 10、5、0 歳の子持ちです。ふだんは京都市立芸術大学の彫刻という分野の教員です。元々は日本画出身ですが、なぜか彫刻を教えています。活動をみてもらうとわかりますが、作品、オブジェというものを作ってはいません。作品のない作家として 30 年生き続けているのです。なぜ彫刻で大学に呼ばれたかということ、制度とか概念を構築することを社会彫刻と呼びます。ヨーゼフボイスという人が考えたアイデアで、社会運動も彫刻。なにかを構築し、概念をひきよせようという動きです。うちの大学もそういう感じで、呼んでくれたのだと思います。実技の指導も一応しますが、私は学内では新しい関係の中から関係性を構築していきます。私は共有空間とよんでいます。言葉にすると、人がひとりいたら、そこに関係性が偏在していて、共有の可能性のある空間をはらんでいる。今日、私がいることから、関係がはじまるのです。その空間を積極的に認識して使うことが、共有空間です。ゴミと自分との関係を考えていましたが、着ている服も自分と関係がある。認識してな

いだけなのです。

認識してないと存在してないと思われそうですし、認識するカタチになかなかありません。ゴミというフィルターになると、それ以上は考えなくなる。もし、それを地面からはぎとると、関係性が変わってきます。拾ったモノを捨てる時にはココロが痛い。すでにあるものをどう認識するか。どう発見するかが、活動の主体かな。新しいものって、そんなにないのです。いろんな関係を人類は磨いてきました。だから、新しいものはありません。その代わりに、埋没している関係が多いのです。自分たちを新しく作り直すことはできないかなーと思っています。どうして関係が成り立っているかという、基本的には愛です。愛に関係する話になると思います。社会的につながりをつくる根幹にあると思っています。照れくさい言葉ですが、愛の周りに関係性はあるのです。愛とは獲得感であり、認識すること。誰かの子供であること、家族であることを認識すると、大事に思えていきます。当たり前すぎると考えなくなる。

現代は、与えられる社会に生きています。仕事、会議、生き方など用意されています。カフェや交流プログラムも用意されています。こういうことには獲得感がないんです。利用するという感じです。獲得感がないと愛が生まれません。どうやって作れるのかなという、労働です。参加することが、関わっていること。そういうことをやっていくと、自分の関係性がわかってきます。認識するのは面倒です。ですから、ラクな人、ラクな方向でしか付き合わない。シンプルな生き方という言葉で、デコボコを避けている。実は多様性の創造は大変です。めんどうくさいことを選び、その中で生きていくのですから。

おそらく、関係性の体力が必要です。この体力は、どうやってできるのか。生活の中で、体力がつくのでしょうか。ファーストフードと違って、昔の飲食はジーンワリと関係性を作っていました。注文するのにも会話が必要でしたしね。東日本大震災や阪神淡路の震災などで、力強さをみていると、そういう体力をもった方が突破口を開いています。国指定の避難所が機能不全しているのをずっと見ていると、共有空間を考えることは、実は緊急時の生き方にもつながるのではないのでしょうか。時代は変化していて、経済的な安定基盤が崩れてきました。そんなことを積極的に考えるためには、体力がいるのではないかと思います。

関係性を含めた自己実現。なりたいたいなと思っているのは自我実現。自分の未来、子供の未来を考えながら、関係性の中で自分の未来を眺めるのは自己実現。ネイティブアメリカンや江戸時代の人、そんなことを考えていたようですね。私は、元々はパフォーマンスグループで、80—90年代半ばまで世界中を飛び回るグループでした。正直いって、調子に乗っていました。ところが、メンバーの1人がHIVに感染して、そのショックをグループで感じて、それからエイズに関する勉強や社会的な問題に取り組まざるを得なくなりました。美術というのはどういう関係を築けるのか。それ以前は、世界に進出するアーティストを目指していましたが、なにをやっているんだろうと思ったのです。アートでは友人を救えない。自分ができることはなんだろう。それが引き起こす社会的な問題とか偏見とかを変えることには関与できるのではと思いました。

そこで、関係性にまつわることのある場を作りました。毎晩、事務所に友人たちが集まって、悲しんだり、話し合ったり、活動が始まりました。Art Scapeという共有空間です。看護師や先生、保健の先生、いろいろな人が出入りしながら、働きかける何かを考えていきました。そんな空間から、いろいろなやり方、新しい運動を模索していました。そういうのが続き、活動が先鋭化していくと、無言の敷居の高さがうまれてきます。新しい人がくると、先に進んだ人との差があるのです。「ジェンダーについて考えたことないな」と、こういう壁は自然に生まれるのですが、無言の壁になります。活動をすすめればすすめるほど、壁が生まれてしまいます。そんな壁をとるために、2週間に1回カフェをやりました。大学のデッドスペースをつかって、学生と掃除して、手作りのカフェをやってみたのです。営業認可をとってないので、パーティーの延長。サービスする側は、パーティーの主催者。しゃべる自動販売機ですから、話しながらサービスも提供していきます。半分、自主企画の営業でした。これがすごく便利な場所になりました。3年間やりましたが、毎晩300人くらいの人々が集まりました。宣伝しないので、友達をつれてくるのです。こういう場所というのはホストがいると、来やすい。それぞれが、自分の言葉で説明して、毎回いろいろな人が集まってきました。オールナイトにしたのは大阪からきた人が帰れないからです。京都大学の隣だったので、先生や病院関係者もやってきました。若手で会いたい人にはここで会える感じでした。

当時は、携帯を持っていなかったのので、ここに集まった人はニックネームでしか覚えてなくて、連絡先を知らなくても、ここにすれば会えたのです。知っている人がいないパーティーは居心地悪いですよ。目の前でコップがわかれると、それを片づけるという、労働が発生すると、いる理由ができてきます。カウンターの仕事は単純ですが、カウンターの後ろにいと、すべての人と出会えるので、後ろに行きたがる人が増えてきました。客のほとんどがマスター。ちゃんとお金もとれるし、掃除もしてくれる。いろんな労働を持つことが、行く理由になったのです。準備から片づけまですごくスムーズでした。でも、建物が歴史的建造物に指定されてしまって、使えなくなってしまい、3年で終わらざるをえませんでした。みんなの連絡先も本名も知らなかったのので、途端に困りました。

困ったのは私だけではなく、常連さんも同じです。常連さんの中には AIDS 関連で活動されている看護師さん達がいて、患者が増えるばかりで社会は変わらない。でも、ここなら話を聞いてくれるし、人材も集まる。そんな思いで集っていた看護師さんが、場所を見つけてくれたのです。今度は、認可をとったカフェをつくりました。バザールカフェといいます。トンカチはアーティストのマークです。デザインもできれば、大工も、施工もできる、つぶしがきく用務員としてアーティストが入りました。バリアフリーを試みましたが、お金なくて出来なかったのので、こころのバリアフリーが自然とおきるような場作りにしました。職にまつわるというのが重要で、たとえば在日の外国人の方でビザを失ったり、国に帰ると死んでしまう方も多いので、そういう方を守る活動をしているグループの方は、そういう方の国の料理をランチにして、メニュー代を彼らに提供しました。作れる人はランチを作る。病院関係者の方も、衛生的な環境づくりを考えます。

京都御所の近くなのですが、たき火ができるのです。これは既得権で、昔からやっていたので出来るのです。ご近所の方同士が認識すると、たき火ができるのは当たり前。消防署も理解していました。都会だと、みんな通報しますよね。たき火ができるカフェってないので、たき火がランドマークになっています。ブラインドの方には点字をつくったり、婦人会がマーマレードをつくって売り上げを寄付してくれたり、庭が広いのでガーデニングや畑作りもできるので、カフェを利用せずにそこだけを使って楽しんでいる人がいました。

関係性に喜びを感じ、他者を思いたいのです。誰がクライアントで誰が雇われているのか意識されないお店です。労働というのがいっしょに働く人のお互いにとっての学びになります。また、必ず労働には守秘義務があることを覚えました。働いているとおしゃべりをしますよね。誰かが聞いたことを、話さないのが不文律。手を動かし作ろう。それがバザールカフェです。1年間は2週間に1回ホームパーティーをしました。そういう中で、どんなカフェを作りたいかを話しました。いろんな人々が集まると、寄付を募ったり、助成金申請の段取りを考えたりとできるので、300万の資金ができました。夏休みの一ヶ月で改装しました。私が現場監督。認可が必要なものは一級建築士。ニコニコした素人が毎日集まって、作りました。みんなの仕事を作るのは本当に大変。



わざと手間暇のかかる仕事を考えないといけなかったのです。効率重視の建築とは逆で、そういう方向から始まると楽しくなる。まずは飯場を作りました。ご飯を食べながら、作業をしますし、ご飯のあるところには人が集まります。現場デビューする人にはペンキ塗りをやってもらいました。1日終わる頃には、ペンキの量と作業量がぴったりになるほど、腕が上がるのです。わざと作り方を教えない。あるペアは、立てつけの方法でも揉めていました。結局、片方が間違っていたのですが、彼は悔しかったのか、次の朝に全部直して、タバコを吸って待っているのです。同時に、庭も庭師の方がいらっしゃって、教えてくれました。庭師の仕事をやめたかったのですが、教えはじめたら、自信を持って現場にかえっていきました。庭師もそうですが、現代の仕事は感謝されることがほとんどありません。お金の分、働くのが当たり前。でも、クレームだけは受けます。それが、スコップを使うだけで、感動されます。素人もやればやるほど、上手になるし、ほめてもらえます。高校中退の子がいましたが、石の表裏を見極めるのがうまくて、庭師さんにスカウトされていました。

素人では出来ないところは工務店さんに頼んで、その時もギャラリーが集まるので、やっている方は気持ちいい。それからは、無料でメンテナンスにきていただけます。こうしてカフェができて、みんなで営業を始めました。有給枠を設定して、それ以外はタダ働きでした。労働対価としては楽しみ。ムリをせずに営業するために、木金土だけオープンしました。材料の無駄を計算しながら、週3だとなんとかまわりました。これは99年に改装して、今も続いています。理事会は3年ごとにメンバーをかえますが、変えるたびに性格が変わります。最初は文化的、次は商業的、社会的に変わっています。京都にお越しの時は、ぜひお立ち寄りください。確実に誰かが助かります。皿洗いができる店でもあります。労働が関係性を作っていくんだなと味をしめたので、なんとなくはまった連中で施工集団を作りました。30台後半になると、生活の変化が起きる時なので、家の改装をしたり、ゲストルームをつくったりと改装は良くあるので、仕事を請け負いました。

同じころ、阪神大震災がおきて住環境が一変したことを考え、一緒に食べたり飲んだりする場所が必要と思い、元々あった場所で屋台を再生しました。仮設住宅をでられない人が強制的にすまわされたアパートです。毎日自殺が起きるような場所です。老齢のこと、アルコール中毒、社会的に復帰な困難な方が残っていました。個別住居として、与えられますが、部屋に籠る一方でした。そこで、屋台をつくり、飲むのだったら一緒に呑もうと呼びかけたのです。シングルマザーの子供たちにはマスターになってもらって、遊んでもらいました。子供が「もうお酒飲むのを止めとき」というと、アル中の人もやめるんです。暗算ができる女の子が金庫番。子供が酒を扱うので、教育委員会に怒られましたが、ちょっと昔にはお店に子どもが手伝いに入るのは当たり前でしたよね。その後、屋台を作り始めました。東京のオシャレなスパイラルでも屋台をつくり、お客さんにマスターになってもらいました。パフォーマンスをやっていたときは両親を呼べなかったのですが、屋台を始めたときには両親を鹿児島から呼んでマスターになってもらいました。実は接待が好きなようで、一番人気でした。オシャレな港区のOLが通う店になって、常連さんが鹿児島までやってきたこともあります。

屋台というのはいろんな時代に、いろんな物がつくられていました。現在は、新しいものは作れません。道路交通法的にも、衛生的にもタイヤがついているか、前からやっているか、車にのせる以外に方法がないんです。私有地の中からOKなのですが、基本的には難しいです。ところがアートの企画で申請するとOKがでるときもあります。今は、様々な場所で屋台がある風景を残すことをしています。屋台は、災害時にも有効に機能するので、東北の震災時にもつくって、こういう機能を現地に置いてみました。共同アトリエも作っていて、ここは、シースルーで労働している様子がわかります。中でなにをやっているかわからないオフィスが多いですからね。

町の方が石の修繕を聞きにきたりとオープンな場になっています。チェーン店の店長さんは差配の自由が利きません。一方、個人商店は、えこひいきができます。差配が利くのです。個人商店をたくさん作って、それがつながる関係を作って、いろんな人に開かれる場を作っていきたいです。屋台というのも小屋というのも、なんにでも使えるロマンティックな空間です。そんなわけで、隙間があったら、小屋を作って回っています。退職祝いに小屋を作ったことがあります。ところが、小屋ができると、娘さんのために無農薬の野菜をつくり始めました。ご近所の方の秘密基地のようになっています。陶芸の素焼きを乾かす小屋も、ご近所の方のバザーや集まる場所になっています。

組立式の小屋もつくりました。展覧会の企画としてつくりましたが、芸大の違法建築として使われています。学生たちには与えられた空間で学ぶことから出てほしいのです。今の学生は、「さあ自由ですよ」というと、フリーズするのです。ですから、自分で学ぶ場所を作ってもらっています。毎年1個ずつ、小屋を作るので、ユニークな授業として大学に取り上げられたので、既成事実となっていますから、違法建築として潰されることはないでしょう。学生たちにはコミュニティの獲得感がないので、人様が作ったコミュニティに行って何かするのはおこがましいと自分たちで言ってきたのです。今は、東日本の方とつながろうと、もぞもぞ動いています。「共有空間で良いのは、たき火だと思っています。震災時も、たき火で生き延びた方がたくさんいて、避難所では毎日焚火が焚き続けられたそうです。たき火がある時は会話が生まれ、労働があふれているので、みんなに居場所があったそうです。

しかし、避難所から仮設住宅への移行があり、多くの方々が個別に住むように

なると様々な問題が起こり始めました。仮設住宅は火気厳禁で焚火はできなくなりました。途端に住民間の意思疎通が難しくなり、諍いや孤立が目立ち、孤独死や自殺が多くなり、本当に深刻な問題となっています。焚火ができなくなったからそうただけが理由ではないのですが、焚火に代表される人々の交わる場の喪失が大きな原因だとおもわれます。たき火は100万年の歴史。人類の歴史です。たき火に人は集まります。その作用はDNA となって刻まれていると思われま

す。直火から離れているのが今の人類。できるだけ、火をおこせる場所を残したいと思っていますが、都市の中では難しいのが現状です。こういう場を残さないと、火を扱えない子供がもっと増えてしまいます。私たちは、子供の頃の経験から、火を起こす経験は残っています。管理された火にしかあたってないと、自分で火との関係性を作れないのです。東日本大震災のときも、毎晩たき火して、豊かな宴会状態の中で、次の日の行動が決まります。どんな会議よりも豊かです。ほんとは、今日もたき火をしたいくらいです。

たき火で大事なものは、でかい火にしないことです。でかいと高揚感がありますが、何か暴力的、扇動的になってしまいます。ですから、小さい火をたくさんつくって、みんなで囲む。たき火をはしごできますよね。会話って、どうしても煮詰まるので、話が途切れたら他のたき火に移れる。5-6人だと、焼いた物をシェアできやすいです。作りたいと願っている共有空間です。でかいものがすべてを担うことは無理なのです。小さい多様なものがたくさんある。それがつながっていくと良いですよ。個人の欲望をちょっと乗せながら運営するのがひとつの形態かな。公共性を考えるときに、上と下がうまくあいにまぎっていったらと想います。自分たちの身の回りにある何か。ちょっとひねったら、何かできる。空間がある、何かできる。アイデアだしあって、そういうことを中心とした場の作り方を考えてみましょう。

マルチハビタットというアイデアがあって、ひとつの家をでかくして城のような家をやめよう。共有という形で持とうと思って、我が家も共有です。家が狭いので生まれたことでもあるのですが、ネコ、イヌ、5人家族なので家がワチャワチャなのです。そこで古いアパートを改装して、ゲストが泊まれる空間を作っています。ひとりふたりなら泊まります。こういうのがあると、飲み会ができたり、子供たちも集まります。家が京都中にある感じです。まず、子供たちはお店に帰ってきます。うちでは、家はそれぞれ、機能で呼ばれていて、寝

る場所は基地とよばれています。お店、基地、アトリエ、だれその家。多機能なものを外に持っているのです。

これは、家族が閉じない方法の 1 つでしょう。書齋が持てないなら、外に共同で持ちこたう。わざわざ外に行かないとならないと、外と家とのパイプを持つことになります。こういうのは面白いと思っています。京都なので、冬は寒く夏は暑いですが、部屋の中から花火が見えますよ。泊まって頂くことができますが、必然的にはうちの家族と交流することになります。いろんな人とつきあえるので、私たちは楽しいのです。京都はオフの用事で、みなさんやってきます。東京はビジネスですよね。オフの時に会うときは、楽しむ時に会えるのが利点です。ものすごく古い建物で、築100年以上の歴史があります。銀月アパートで検索してください。あらためて、ありがとうございました。

ゲスト 小山田

是非、京都に来てください。

細かいつながりから生まれることもあるのです。杉並に来たのは初めてですが、こうやって、顔の見える関係ができると来やすくなります。またよろしくおねがいします。

学習支援者：日沼

小山田さん、本日は本当にありがとうございます。私の経験をお話すると、杉並に20年前に引っ越した時、大家さんの持っている離れに住むことができました。大家さん、近所の酒屋さんと仲良くなり、庭つながりで、ご近所さんとも関係性が出来ました。バーベキューをした時にはできあがった肉料理をおすそ分けしたりする関係ができました。そうした経験も、今の自分の仕事につながっていると思います。今回の講座をきっかけに、みなさんと何か、やることができたらなと思っています。それでは、今日もおつかれさまでした。